

本の ひろば

[月刊] キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2016年9月1日発行（毎月一回発行）第704号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

修復的贖罪論の可能性を探る

河野克也

エッセイ

わたしとヘブル書

齋藤孝志著『信仰とは何か?』 小林重昭

本・批評と紹介

岡野昌雄 著

信じることをためらっている人へ

片柳榮一

ジェレミー・ダフ 著／浅野淳博 訳

エレメンツ 増補改訂版 ランドル・ショート

H.キュンク 著／矢内義顕 訳

キリスト教は女性をどう見てきたか

笹森田鶴

樋野興夫 編著

がん哲学外来で処方箋を 榊原 寛

日本キリスト教団出版局 編

説教黙想 アレテシア

ヘブライ人への手紙 宮崎 誉

上智大学中世思想研究所 編

中世における制度と知 桑原直己

バージル・ホール 著／堀江洋文 訳・解題

ヨハネス・ア・ラスコ 南 純

ノエル・ストレットフィールド 著／中村妙子 訳

ふたりのエアリエル さくまゆみこ

近藤勝彦 著

救済史と終末論 牧田吉和

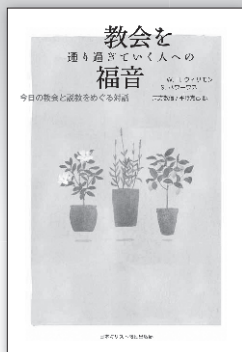
本屋さんが選んだお勧め本

近刊情報

書店案内

9 SEPTEMBER
2016





教会を 通り過ぎて いく人への 福音

今日の教会と説教をめぐる対話

W.H.ウィリモン/S.ハワーワス
東方敬信/平野克己 訳

現代アメリカを代表する説教者と神学者による、通り過ぎようとする現代のキリスト者に語られた説教10編と、その率直な批評。 ◆四六判 並製・242頁・2,376円

CD版 讃美歌21による 礼拝用オルガン曲集 第4巻 礼拝の時と教会暦1 礼拝・アドヴェント・クリスマス

飯 靖子/
志村拓生 演奏

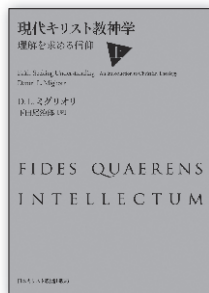


全6巻完結!

◆44曲収録・1944円
演奏のポイントが分かる音楽CDシリーズ。クリスマス、の喜びを歌う賛美歌のメロディーによるオルガン演奏集。

現代キリスト教神学 理解を求める信仰

D.L.ミグリオリ
下田尾治郎 訳



◆A5判 上製・346頁・4536円
現代英米圏で愛用され続ける最良の組織神学概論テキストの新訂版。上巻は啓示論、正典論、三位一体論、創造論などを収録。

イベントのご案内

2016年9月開始

教文館神学セミナー 全4回

教文館を会場に、各主題に精通した神学者と共に学ぶセミナー。2016年度は「神学は語る」シリーズ(日本キリスト教団出版局刊)をテキストとします。牧師・信徒を問わず、どうぞご参加ください!

第1回

2016年9月17日(土)
13時~15時 定員20名

●講師: 辻学 (広島大学教授)
●テキスト: 『パウロの教会はどう理解されたか』

会場

教文館7階 会議室

参加費

テキスト代込の場合 3,000円
テキスト持参の場合 1,000円

※神学生はいずれの場合も500円割引

お申込

教文館キリスト教書部

TEL 03-3561-8448
FAX 03-3563-1288
Eメール xbooks@kyobunkwan.co.jp

第2~4回については、詳細が決まり次第お知らせいたします。 主催/教文館キリスト教書部、日本キリスト教団出版局



出会う・本・人

修復的贖罪論の可能性を探る——河野克也

六月十二日にR J（修復的司法・正義）の全国交流会に参加し、短い発表を担当した。R Jが日本のキリスト教会で広まらないのはなぜか、という問いかけに答えるためだ。この問いかけは、日本にR Jを紹介した西村春夫教授によるものだが、私自身未だに納得のいく答えを見出せていない。交流会とその後の食事でR Jの実践家の方々と議論を深めたことは、大きな出会いとなった。

実はこの出会いは二〇〇六年六月のもう一つの出会いに遡る。東京ミッション研究所の招きで来日したハワード・ゼア氏は、メノナイト派の神学を背景に、近代R Jの理論構築と実践を牽引してきた人物だ。その名著『修復的司法とは何か——応報から関係修復へ』は、西村教授らによってすでに翻訳出版されており、通訳を担当する上で大いに参考にさせていただいた（新泉社、二〇〇三年・原著は一九九〇年）。

さて、なぜ日本の教会ではR Jが広まらないのか。同書にも示唆されているが、主な要因は、どうやら教会の伝統的な贖罪論にありそうだ。西方教会の贖罪論は、アンセルムスの充足説に始まりカルヴァンの刑罰代償説に固定化していったが、その根底には、正義の要求を満たすために独り子の十字架刑を要求するという神理解がある。その神理解を残酷だとする批判を、神学者たちは、罪の深刻さを理解しないヒューマニズムだと切り捨ててきた。

普遍的真理である贖罪論の教理を近代の思想ごときに批判されてたまるか、ということであろう。しかし、問題はそれほど単純ではない。贖罪論と西洋刑事司法の関係史を辿った研究（Timothy Gorrige, *God's Just Vengeance*, Cambridge UP, 1966）によれば、アンセルムスの充足説自体、当時の名誉を重んじる階層社会を反映する。王侯貴族への名誉毀損を極めて深刻な罪とする当時の刑法と並行して、彼は無限者なる神への名誉毀損を有限者なる人間には贖い得ない罪とし、神が人となって損害を充足することを要請した。アンセルムスの贖罪論は、自らに都合の良い秩序を維持するために法を整備し、犯罪を定義し、刑罰を占有した権力者たちと、思考を共有する。農民戦争を徹底的に武力制圧するように命じたルターも、メノナイト派を火刑に処したオランダ改革派も、権力者目線で秩序維持に走ったと言えよう。コンスタンティヌス帝以降の西方教会において、正義は、持てる者が持たざる者を抑圧する大義とされ、残酷な処刑を正当化する根拠とされてきた。近代R Jが迫害の歴史を持つメノナイト派に牽引されてきたのは、偶然ではないだろう。R Jとの出会いは、抑圧された者の視点で徹底的に教理を再構築する機会となりそうだ。

（かわの・かつや 日本ホーリネス教団中山教会牧師、青山学院大学非常勤講師）

わたしとヘブル書——推薦の言葉に代えて

『信仰とは何か?』 齋藤孝志著

ヘブライ人への手紙に徹して聴く

「人生は出会いで決まる」とは、ユダヤ人哲学者マルティン・ブーバーの言葉です。

私は、ここに「著者との出会い」、「人生最大の出会い」、そして感動的な「ヘブル書との出会い」を紹介し、推薦の言葉とさせていただきます。

著者との出会い

私は、一九六八(昭和四三)四月、直接献身へと導かれ、東京聖書学院(東京都東村山市)に入学を許されました。本書の著者、齋藤孝志先生とは、その東京聖書学院で出会いました。米国留学から帰られた著者は、東京聖書学院で情熱を持って後進の指導に当たられました。著者は内に秘めたビジョン(一、開拓伝道 二、世界宣教 三、東京聖書学院の充実 四、文書伝道)を、「開拓」誌(月報)で熱く語りました。そして、その文書を東京聖書学院修養生(学生)、卒業生、関係者等に配布され、エネルギーに文書活動を展開されました。著者のすごさは、文書でビジョンを書き・語るのみならず、それを実践された事



小林重昭

です。著者は東京聖書学院での教鞭の傍ら、先ず府中キリスト教会(東京都府中市)で開拓を行い、続いて由木キリスト教会(東京都八王子市)の開拓に携わりました。驚いたことは、それぞれの開拓教会でたちまちの内に、会堂建築を行ったことです。さらには、続いて遣わされた厚木キリスト教会(神奈川県)に於いても献堂されました。実に、その情熱と実行力は四七年経った今も変わりません。

いや、変わらないどころか、益々その情熱は燃え盛り、七歳の誕生日(喜寿・二〇二二年一月三日)に、「七冊の本出版」というビジョンを立て、八一歳を迎えた今回、ヘブル書(五冊目)の出版となりました。しかも、肉体的には満身創痍(五〇年来糖尿病を患い、右目失明、左目八回の眼底出血、脳梗塞大小六回、心筋梗塞、右手右足に後遺症)というハンディを背負った中のチャレンジです。

さて、忘れられない著者とのもう一つの出会いがあります。

それは、「霊的・信仰的・神学的」出会いです。すなわち、著者が三五年前に出版された、『まことの礼拝——レビ記から』によって、きよめられた者たちを永遠に全うされたのである(ヘブル一〇・11~14)。まさに、著者はレビ記の信仰的・神学的・祭儀的、そして豊かな霊的恵みを土台に、一味も二味も違う「ヘブライ人への手紙に徹して聞く」を、語られたのです。

人生最大の出会い

私が初めてキリスト教に触れたのは五十年前です。すなわち、学生時代最後の年の秋でした。剣道の先輩に誘われて、一九六五(昭和四〇)年九月(第一土曜日夜)、日本ホーリネス教団旗の台キリスト教会(東京品川)に導かれました。開拓まもない教会で、畳の部屋にパイプ椅子が並べてありました。すでに四〇名近くの人が集い、集会所は一杯でした。初めて歌った讃美歌「罪咎を担う」(聖歌六〇七)が、心に快く響きました。

当時の私は、法律家を目指して勉強に励んでいました。しかし、人生の意味・目的が分からず、人生の空しさに悩んでいました。空しさを紛らわすために、貧乏学生の身でありながら毎晩酒に入り浸っていました。眠れない夜が四カ月続き、眠れない苦痛を味わいました。そんな折、冒頭の東京品川の旗の台教会に導かれたのです。九月第一週の土・日・月夜の三日間、「秋のキリスト教特別伝道集会」が持たれていました。(略)

四か月後(一九六六年二月六日)、受洗の恵みに与りました。それから、まもなく「宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあるのか。……『ああ、麗しいかな、良きおとずれを

のメッセージ』(一九八二年、ニューライフ出版)との出会いです(現・『決定版』まことの礼拝への招き——レビ記に徹して聞く、二〇二二年、ヨベル)。

この書物は、著者が厚木キリスト教会の修養会(一九七九年二月)で語られた、レビ記からの六回の説教です(厚木キリスト教会十周年記念出版)。実に、「難解なレビ記の祭儀に示される福音の奥義(キリストの十字架の秘儀)」が、分かり易く解き明かされ、霊的深みを持って私の魂に迫りました。まさに、心の燃える思いへと導かれたのです。

著者は、「旧約聖書(二九卷)全体がイエス・キリストを証言している書物である」(ヨハネ五・39)との救済史観に立ち、新約の光からレビ記を再解釈するという解釈原理に徹しました。すなわち、主イエス・キリストの生涯・人格・働きという光の中でレビ記を解釈したのです。そして、著者は「レビ記の最大の注解書は『ヘブル人への手紙』です」(『決定版』33、59、101頁)と、強調されヘブル書からの解釈を紹介します。

例えば、レビ記八章は「祭司の献身」を記します。ヘブル書の記者は、新約の光の中で次の様に解釈します。「こうして、すべての祭司は立って日ごとに儀式を行い、たびたび同じようないけにえをささげるが、それは決して罪を除き去ることはできない。しかるに、キリストは多くの罪のために一つの永遠のいけにえをささげた後、神の右に座し、それから、敵をその足台とするときまで、待つておられる。彼は一つのささげ物

告げる者の足は」(ローマ二〇・14、15)のみ言葉により、献身に導かれました。

その後、約二年の準備期間を経て、一九六八年四月直接献身の道へと一歩踏み出し、東京聖書学院に入学しました。四年後、卒業と同時に宣教の第一線に遣わされたのです。実に、伝道者となり四四年経ちましたが、今回、「レビ記の最大の注解書は『ヘブル人への手紙』です」を再確認できたことは、感謝でした。

ヘブル書との出会い

シドロー・バクスターは、ヘブル書の主要概念について次の様に記します。

「この手紙はユダヤ人クリスチャン、特にユダヤ主義へと墮落する誘惑にさらされている人たちに宛てて書かれたものであり、モーセの契約と組織に対する福音の卓越性を示すことに関するものである。この手紙は、このことを古い契約を見くびることによってではなく、新しい契約の完全性と最終性を示すことによって教えている。新しい契約はユダヤ主義をけなすのではなく、それを変貌させ、究極的に成就させることによって、それに名誉を与えている。それゆえ、ここにおける鍵となる言葉は、『さらにすぐれた』であり、一三回出てくる。……この手紙は、一〇・19が分かれ目であり、一〇・19から終わりまでは、キリストの人格とみわざに対する真の応答としての信仰に

強調が置かれている」(『旧新約聖書全解』八〇八頁)。

私の驚くべき「ヘブル書との出会い」は、バクスターの言葉を借りれば「さらに優れた」者としての、「キリストの人格とみわざに対する応答とその信仰」となります。

*一つ目は、ヘブル二〇章19、20節です。感謝なことに、伝道者として四四年、み言葉の御用に確信を持って当たらせて頂きました。その確信の根底にあった事実と信仰は、十字架による「主イエスの血潮」でした。ヘブル書は次の様に記します。

「兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかることなく聖所にはいることができ、彼の肉体なる幕をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとって、はいつて行くことができるのであり」。

まさに、「新しい生きた道」です。そこを通って、私たちは神に近づくことが出来ます。しかもそれは、十字架による新しい道です。実に私たちが、「はばかることなく、大胆に聖所に入る」ことができるのは、『イエスの血による』のです。

本書の著者も「神に近づく新しい道」として、「イエスの血の力」を強調します。

「それまでは、石の上に神の律法が書き記されてきました。これからは、神の律法は人の心に記されるのです。もはや律法を右に書き記す必要がなくなったのです。それで、『兄弟たち』と親しくよびかけられたのです。『わたしたちは、イエスの血

によって聖所に入れると確信しています」と、ヘブライ書の著者は言いました。ですから、彼らは、レビ人の祭司の執り成しは必要なくなったのです。イエスご自身が垂れ幕となってくださったのです。これは全く新しい礼拝の道です。イエスの真実で命にあふれる生き生きとした命の道です。誰でも、何時でも、遠慮なく、自由に神様を礼拝し、神と人に自由に生き生きと仕えることが出来るようになったのです。イエスの死によって、神に近づく新しい道が開かれたのです」(本書二九頁)。

特に、この主イエス・キリストの「十字架の血の力」を裏付ける、大きな支えとなったのが前述した「レビ記」との「霊的・信仰的・神学的」出会いでした。

「イエスの血」との関係で、出エジプト記一二章の過越の奇跡の出来事が気になりました。勿論その中心は、小羊をほふってその血を家の「かもしと入り口の二つの柱につける」(22節)ことでした。ところが、モーセはこの奇跡の意義(小羊の血潮)について、出エジプト記では何も記しませんでした。だが、モーセがこの問題をレビ記において徹底的に解明しようとした事を知りました。すなわち、モーセ五書におけるレビ記の特異性とその存在意義がそこにありました。レビ記は、「燔祭」(一章)、「酬恩祭」(二章)、「罪祭」(四章)、「衍祭」(五章)における、動物の血を強調しました。しかし、ヘブル書の記者は、動物の犠牲の限界を解説します。「こうして、ほとんどすべて

流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない」(ヘブル九・22)。

そして、レビ記一七章11節は、「何故、血が流されなければならぬか」という理由を記します。「肉の命は血にあるからである。あがないをするため、わたしはこれをあなたがたに与えた。血は命であるゆえに、あがなうことができるからである。まさに、罪なき神の小羊イエス・キリストの血潮こそ、私たちの罪を贖う力です。この確信が、私の四四年の講壇を支える力となりました。感謝です。

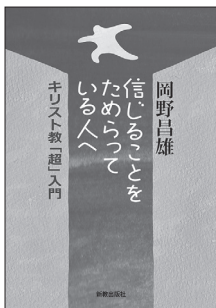
*二つ目は、ヘブル一二章二節です。「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つ、走ろうではないか。彼は、自分の前に置かれている喜びのゆえに、恥をもちとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである」。

四〇歳代の時です。少し無理をしたことが原因で約一〇年間ヘルペスを患いました。病に対する対処方が分からない中、悶々と牧会伝道に取り組んでいました。しかし、ある時「『信仰の創始者であり、完成者である。……神の御座の右に着座された』イエスから信仰の目を離さない」ようにと、語られたのです。「信仰を私の内に始められた方が、また、完成者であられる」。それまでも聞いていた真理であり、よく知っていた信仰の根幹でした。しかし、聖霊なる神が、私の全存在に対して静かに語りかけられたのです。ハレルヤ!

居心地の悪いイエスから離れられなくなる
岡野昌雄著

信じることをためらっている人へ

キリスト教「超」入門



片柳榮一

題からも推測されるように、本書はキリスト教への一種の入門書であるが、極めてユニークなものである。第一章の「イエス様、それは理不尽すぎませんか」というタイトルが示しているように、我々が聖書を読み、キリスト教に接するなかで日頃浮かんでくる素朴な疑問から出発する。そしてこの書のユニークさは、そうした疑問がこの書を読むことによつて雲散霧消するということにはなっていないところにある。そうではなく読み進めるうちに、その納得のいかない居心地の悪さにむしろとどまろうという気になってゆく。たとえば空腹のイエスがイチジクの木を呪つて枯らす話、イエスは平和ではなく剣をもたらしのために来たという話、ユダに対して生まれてこなければよかったという話、これらはどうも我々には納得できない話である。こうした我々の違和感に対して著者は、聖書は我々に道徳を教えようとしているのではなく、イエスという人間が人々に与えた衝撃、違和感を大事に書きとどめているという。そして著者はこの衝撃の源はイエスという人のラディカルさにあるという。「ラディカル (radical)」という言葉は、今日では「過激な、

急進的な」という意味で用いられることが多くなっていますが、もともとは「根 (root)」の語源となっているラテン語「radix」から来た語で「根源的な、根本的な」という意味の語です。私がいエスはラディカルだったという場合、この後者の意味です。つまりイエスは根源的・根本的に神と人との関係を問い直した人物だったということです。律法や掟にとらわれず、既成概念にとらわれず、いつも一番深いところまで、根っこまで掘り下げて神と人との関係を問い直した。それは従来の考えを根っこからひっくり返すことであり、だからこそ人々の目には過激な人物と映つたのだと思います」(七一―七三頁)。著者はイエスに對する違和感の根底に、「愛と平和の人イエス」というふうに私達が安易に作り上げている固定観念があるのではないかと、問いかけています。そうした出来合いの固定観念がイエスの振る舞いの不条理にぶつかって碎かれる時、私達はむしろ自分もその中に生きている現実の深いところにある、或る生き生きとしたものに触れるのであり、そしてこの居心地の悪いイエスから離れられなくなる。そうした真実をこの書は思い起こさせてく

れる。

著者は、私達日本人がなかなかキリスト教に馴染めない原因を考える。そしてその原因の一つとして、聖書のキーワードとなっている基本的な言葉の意味の違いがあるのではないかといい。その一つとして「罪」という言葉をとりあげる。著者によれば聖書がいう「罪」とは犯罪を犯すことでも悪行を重ねることでもない。「罪とは「的はずれ」な状態、つまり本来向いているべき神の方を向いていないこと、神に背を向けている状態を指す言葉なのです」(七九頁)。著者は「罪」を道徳的、法律的「悪」から区別して、人間が「的を外し」本来の方向を向いていないこととして捉え直そうとしている。楽園の禁断の果実を食べて「善悪を知る」者になったということも、何かたいそなな知者になったということではなく、それまでは神の意志に沿っていたので判断する必要がなかったのに、以後的外れな状態のなかで、自ら善悪を判断しなければならないという暗模

索のなかに落ち込んだということであるという。いたるところにユーモアの溢れたこの書を読みながら、あらためて著者の肩ひじを張らない自由な日頃の歩みかと思われた。このユニークな書はやがて必ずまた再版を求められるであろう。そのときには、思いのほか硬い今のタイトル『信じることをためらっている人へ——キリスト教「超」入門』よりも、第一章のタイトル「イエス様、それは理不尽すぎませんか」にした方が良いように思う。この方が、内容とスタイルを、一層率直に表しているように思える。

(かたやなぎ・えいいち＝聖学院大学客員教授
B6判・一六〇頁・本体二二〇円＋税・新教出版社)

クリスティン・ジャック編 永井みぎわ訳

世界がぶつかる音がする サーバントの物語

サーバントは、アジアの街に向かい、貧しい人たちの声を知り、学び、愛し、共に生きてきたクリスチャンのネットワーク。彼らの声、そして彼らが出会ってきた人たちの声を記録したのが本書。世界宣教、地域宣教、貧困や社会問題、支援活動に興味がある人たちにぜひおすすめしたい書。*好評発売中！ ●四六判・三〇四頁・一、三〇〇円＋税

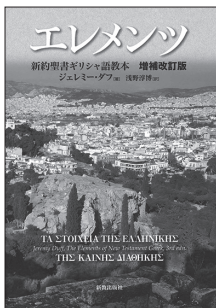
信仰とは何か？ 「信仰をもつ」とは どういうことなのか？

「信仰とは何か？」
「信仰をもつ」とはどういうことなのか？
預言者・大祭司・王であるキリストの仲保によって得られる新約の恵みを旧約との連関から説くへブル書に「徹して聴く」 ●一〇〇〇円＋税

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
*自費出版の専門出版社*資料・星

あらゆる学びの場でお勧めできる教本
 ジェレミー・ダフ著
 浅野淳博訳

エレメンツ増補改訂版
 新約聖書ギリシャ語教本



ランドル・シヨート

The Elements of New Testament Greek (ケンブリッジ大学出版局) という教本は、およそ一〇〇年間に渡って、三回ほど大きく改訂され、英語圏の多くの大学や神学校で使われてきている。特に、英国の新約学者であったジョン・ウエナム氏による第2版(一九六五年)は、学者である教師たちの非現実的な期待よりも、生徒のニーズを大事にする教本として知られ、オクスフォード大学等で長年採用されてきた。そして、ジェレミー・ダフ氏による第3版(二〇〇五年)も、教育現場での実践によって更に洗練され、ウエナム氏の基本的なアプローチを受け継ぎながらもなお第2版を大きく改訂し、英語圏において新約聖書ギリシャ語教育のための素晴らしい貢献となっている。本書は英語版の第3版に基づいている翻訳ではあるが、「ただの翻訳」ではない。というのは、翻訳者である浅野淳博氏(関西学院大学神学部教授)自身はダフ氏との交友もあり、教育現場での実践に基づいて日本語の増補改訂版のみならず、それ以前から英語の第3版制作にも貢献してきたからだ。

さて、本書の特徴を確認しよう。この教本では、分かりやす

音子音動詞」という特殊な変化をする動詞(11章)を覚える時となる。しかし、これも適度に取り扱われているため、学習者は圧倒されることなくついていけるはずである。次に名詞と形容詞の第3変化が導入され(12章と13章)、それと似た形を取る分詞(14章)の良い土台となっている。残っている大部分は動詞の受動態と中間態(15章)、完了形(16章)、接続法(17章)、また、特徴的な変化や不定法の用法等(18章と19章)であるが、最後に、条件文や比較表現等、様々な「重要表現」(20章)と、アクセントの仕組み(21章)がこの教本の締め括りとなっている。これ以外の基本的な文法や語形変化も所々にちりばめられているが、以上が本書の概観である。ちなみに、この教本を利用してきた筆者の経験では、真剣に取り組んでくれる学習者であれば、教室で七〇時間を過ごし、復習・予習のために大体その倍の時間を使って頑張れば、二〇〇時間ぐらいでこの教本をマスターすることができるかと確信している。

ギリシャ語の教師や学習経験者であればお気づきになったかと思うが、ほとんどのギリシャ語教本と違って、本書は冒頭においてではなく、最後の21章でアクセントの仕組みを取り扱っている。実は、これは日本語版の特徴の一つでもある。英語版の第2版と第3版では、教育上の理由でアクセントは初心者にとって余計な悩みとなってしまうように思われ、その説明が削除されている。いずれにしても、アクセントを重視しながら学んでいきたい方は、日本語版ではそれが可能になっているので

い説明、適切な例文、多くの練習問題、およそ六〇〇の語彙、各章と四つの付録に出てくる多くの図表、そして手近な参考索引を通して、学習者は徐々にギリシャ語の「エレメンツ」を身につけることができるように工夫されている。「徐々に」というのが大事で、例えば、学習者になるべく圧倒されないように、21章のうちの12章(2章、5-8章、11章、14-19章)において、動詞が適度に分解され、少しずつ導入されている。

大雑把に言うくと、学習者は次の順で学んでいく。アルファベットの発音(1章)を覚えた上で、動詞と名詞のもつとも基本的な構造(2-3章)を確認し、前置詞(4章)、そして形容詞の第1と第2変化や英語のbe動詞に相当する動詞の基本形(5章)を覚える。ここから動詞の世界がどんどん開かれていく。現在形以外の基本形(6章)、命令法や不定法等の叙法(7章)、そして「異態動詞」の基本形(8章)を学習する。これまでの動詞変化を消化しながら比較的簡単な指示詞と代名詞と接続詞(9章)を覚えてから、多少難しい関係節や直接/間接話法(10章)を学んでいく。そこから「第2アオリスト」と「流

ある。

筆者は二〇〇八年に出版された『エレメンツ』を大学の教室とオンライン(gri.shiagoo.com)で使ってきたが、増補改訂版の多くの改善点のうち、特に次の点は本書の使用者に大変歓迎されるのではないかと思う。①ギリシャ語のフォントがより綺麗で、読みやすくなっている点。②練習問題の回答例が巻末ではなく、各章の最後に載せられている点。③誤字脱字が修正され、かなり減っている点。④伝統的なエラスムス式の発音法が引き続き採用されているが、現代ギリシャ語の発音法も考慮されている点。

個人の再訓練コースとして、グループスタディーとして、あらゆる学びの場でお勧めできる教本であるので、大いに活用されてほしいと思う。

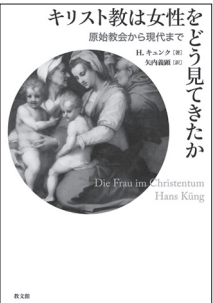
(J. Randall Short = 東京基督教大学教授)
 (B5判・二六七頁・本体四〇〇〇円+税・新教出版社)

あなたはどの時代に取り残されていますか？

H・キュンク著

矢内義顕訳

キリスト教は女性をどう見てきたか 原始教会から現代まで



笹森田鶴

緒言に記載されているように、本書はハンス・キュンクの『時代の宗教的な状況』第二巻『キリスト教——本質と歴史』（一九九二年）の抜粋・編集によって二〇〇一年に出版された。原題は『キリスト教における女性』であるが、邦題通り、様々なパラダイムの中で的女性たちの役割を概観し、各時代の教会の課題を示している。刊行十二年で七刷を重ね、各国語にも翻訳されている。二十世紀のカトリック神学者の中で飛び抜けて著名なキュンクの、七十七歳での著作の待望の邦訳である。

なぜ抜粋本をキュンクが出版したのか。それは千頁にも及ぶ『キリスト教——本質と歴史』の一部分では、女性に関する内容が埋没してしまうことを案じてのことであった。一冊にまとめることによってキリスト教における女性の位置づけに関する歴史——ヨーロッパにおける西方的な枠組みという制限の中の歴史——が明確になるようにという意図があった。キュンクが八〇年代以降、自由にそして集中的に研究した事柄のひとつにキリスト教における女性の役割の研究がある。そこにエキューメニカルな視野やエリーザベト・モルトマン、ヴェンデル博士

やベルナデット・ブローテン博士らを筆頭とする女性の神学者たちとの誠実な共同研究に支えられ、見出すにも困難な歴史上の女性たちのありのままの姿の再構築を行ったのである。

原始キリスト教、初期の教会、中世、宗教改革時代、近代そして近代以降という各時代の中で、当時の教会の中の女性たちの歴史を追っていく。ユダヤ人キリスト者の歴史の始まりにおいては、労働者などの周縁の存在が中心であり、その集団には女性たちも含まれていたはずであった。しかし時代とともに変化が起こり、女性たちが次第に教会という組織の中で疎外されていく様子を伝える。

キュンクは「なぜ」と問う。誰に責任があるのかと問うのである。男性と女性が相互に調和的で、平等な共同体を形成しようとする、なぜ必ずそこに制限がかかるのか、その関係を否定する力がなぜ働くのかと問う。そして時代ごとのパラダイムこそが女性の真の解放を妨げてきたと指摘する。

家が、教会が、結婚という制度が、生活様式の中での伝統的な役割が、女性を性的な存在としか見出せない狭さが、女性蔑

視や女性嫌悪が、教育が、肉への敵視が、文化が、社会制度が、法律が、聖書解釈が、女性たちを拒否し続けたと述べる。それが福音の本質とかけ離れていたことや、特別な女性——イエスの母マリアや修道女、処女、寡婦、母親——を除き、多くの女性たちはキリスト教によってその姿を歪められ、ひいては魔女狩りという大量虐殺の被害者となっていたことを、しかもそれが神学的に根拠付けられていたという歴史を、教会は認めなければならぬ、と主張する。そして宗教改革という最も激しいパラダイム・シフトが起こった時でさえ、家父長制の社会構造の変革には至らなかったとキュンクは述べる。女性が禁欲に身を置かないと評価されない世界観が崩壊し、身体性や性別自体が神からの賜物であり、女性も男性もキリストの友であることがルターによって取り上げられたとしても、である。そして近代以降の啓蒙主義によってようやく女性たちの解放は著しく進み、原始教団に再び教会の将来を見出すのである。

キュンクが紐解く各時代のキリスト教のパラダイムの中に、現代のわたしたちと同じような感覚や思考性を見出す時、わたしたち読者ははっとさせられる。わたしは一体どの時代に生きているのか。人間のセクシュアリティを全面肯定できないでいる自分は、一体いつの時代に取り残されているのか。その意味でキュンクが言うように、この著作は現代から過去を見ていく。つまりわたしたちの姿を浮き彫りにする。

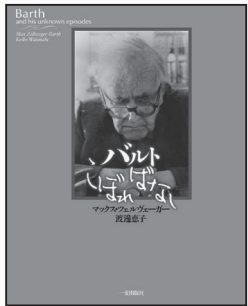
最後に、二十五年前に自身が作成した実践的な教会改革について検証し、変化した事柄と未だ変化がない事柄を数え上げる。避妊の許可や中絶の判断、女性の意思決定機関への十全な参与、司祭独身制の廃止、女性の叙階などは変わらなかった。しかしたとえこの先も変化がないとしても、決してあきらめてはいけな

（四六判・一九六頁・本体二〇〇円＋税・教文館）



バルトこぼればなし

マックス・ツェルヴェーガー
渡邊恵子



生身の人間としての自分を 知ってほしい（バルト）

長女の夫が身内の立場から
バルトを語り「義父カール・バルトの思い出」、
長男一家と親交深い訳者が、
親族・孫たちや、
バルト・アーカイヴズ元館長に
インタビューして詳らかにした
バルトの素顔「カールおじいちゃんの思い出」。

A5判変型・上製
定価 [本体 2,000 + 税] 円
ISBN 978-4-86325-096-3



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

カフェと出会って生き方を変えた人たちの証言集
樋野興夫編著

TOMOセレクト
がん哲学外来で処方箋を
カフェと出会った24人



榎原 寛

「二人に一人はがんになる」そして「三人に一人はがんで亡くなる」と言われている。

あるとき樋野先生に、「三人に一人はがんで亡くなる、と言われていますが、あとの二人は亡くならないのですか？」とお尋ねしたことがある。「もちろん亡くなります」との答えであった。いうまでもなく、がんによる場合もあれば、心疾患による場合も、事故の場合もある。もちろん天寿を全うすることもある。「すべての人が死ぬのです」。この現実を、誰もが分かっているが、自分のこととして受け止めている人は少ない。「がん哲学外来メデイカル・カフェ」においてになる方々は、その意味でゴールがはっきりしているからこそ、元気で生きようとしていている人々だといえる。これは本書の前書きで樋野先生が「患者は、自分に寄り添ってけれながら、治療に関して第三者の目線で冷静に意見してくれる仲間、そこに行けば穏やかな気持ちになれる場を求めています」と言っているとおりでである。カフェでのひとときによって問題が解決に至るということはないけれど、問題の解消へとつながり、一日一日を元気で生

きる力となる。

さて、本書は「がん哲学外来メデイカル・カフェのこと」「がん哲学外来メデイカル・カフェと出会って」の二部からなる。第一部は、「がん哲学外来メデイカル・カフェ」について、

樋野先生が書き下ろしている。著者が島根県出雲市大社町鶴峠に生まれ、やがて五人の人物、南原繁、新渡戸稲造、内村鑑三、矢内原忠雄、吉田富三と出会い、今日の病理学教授、樋野興夫があることを知る。綴られた著者の原体験は、大変興味深い。

「中皮腫との関わりから人との関わりへ」では、著者の転機となったアスベスト問題について語られている。ここからは、病理学教授の勤めを果たしつつ、「がん哲学外来」を立ち上げるに至った著者の、患者に対するというより、あくまで一人の人を大切にする姿勢をくみ取ることができる。

メデイカル・カフェに来ている方々とこんな話をしたことがある。「これからはがんでない人のほうが、肩身が狭くなるんじゃない」「そっだよ、あなた、がんじゃないの。残念不工」

集が第二部である。著者たちが悩んだ日々、苦闘の日々を過して今日にいたるまでの赤裸々な証言とともに、今や自分のためだけでなく、誰かのお役に立ちたいという生き方の変換が起きていることを、奇跡と言ったらオーバーだろうか。

これら二十四人の一人一人に、樋野先生が「言葉の処方箋」を寄せているのもすばらしい。「暇気な風貌」を任ずる樋野先生からは、一人一人を思う優しい眼差しを感じることができる。

本書は私のため、あなたのために書かれたものだと言っているのではない。また、神の愛を伝え、人と寄り添う姿勢を示唆するものとして、使命に生きるキリスト者の必読の書であると思う。

(さかさばら・ひろし)ワールドビジョン・ジャパン理事長、お茶の水クリスチャンセンター副理事長、がん哲学外来お茶の水メデイカル・カフェ代表
(四六判・一六〇頁・本体一五〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局)

まさかとは思いますが、がんはもうひとことではない時代である。自分ががんになるか、家族か、親戚か、友達か。そこで、「なぜ自分ががんになってしまったのだろう」「何の悪いことをしたのだろうか」「自分の人生なんだったのだろう」「これからどうやって生きていけばいいのだ」「死ぬために生まれてきたのか」などなど、哲学が自分のうちに始まる。それは苦闘かもしれない、苦痛かもしれない。そこに「外来」の需要がある。病院では、診察や治療の合間に、コーヒーやお茶を出してくれることはない。しかし、メデイカル・カフェの外来は、お茶を飲みながら、ある時はケーキを食べながら、痛みを分かち合う外来である。時には家族に話せないことを、寄り添う仲間と気兼ねなく話すことができる。聴いてくれる、自分も聴く、ここに癒しが行われる。それは文字どおり「双方向性の癒しの場」である。

そのようなメデイカル・カフェに来会された二十四人の証言

三浦綾子366のことば

森下辰衛 監修 松下光雄 監修協力



三浦綾子の著作から、そのことばに一年を通して触れられるよう、366の珠玉のことばを厳選して収録。美しい草花のイラストも添えられ、愛蔵書・贈り物に最適。
四六判並製・160頁・16200円

神の愛は、すべての困難を超えてあなたを抱きしめる

アガペーの言葉 山崎英穂

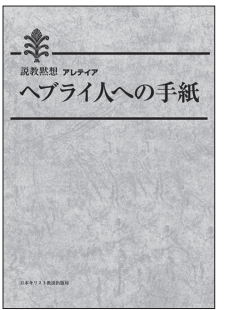


アガペー(愛)が、実際に触れることのできる温かさをもって感じられる80のメッセージ集。疲れ果てた心に神の愛が語りかける。
A5判並製・192頁・21600円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyout@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》
<http://bp-uccj.jp>

慰めを語りかける神の御言葉に聴く説教黙想集
日本キリスト教団出版局編

説教黙想 アレテイア
ヘブライ人への手紙



宮崎 誉

本書は「慰め（パラクレシス）」を伝える書物として、ヘブライ人への手紙の味わいを紹介する。『説教黙想 アレテイア』のシリーズは、礼拝説教に取り組む説教者の助けとなるために聖書解釈と黙想例を提供する書物で、多くの牧師の愛読する黙想集なので、礼拝説教を通してアレテイアの黙想に触れて養われている信仰者も少なくないだろう。

ヘブライ人への手紙は、難解な印象を与える書物の一つだと言え。その性質について、序論を記した加藤常昭氏はW・レインを引用し、「ヘブライ人への手紙は、謎解きが好きな者にはひとつの喜びである」（七頁）と紹介する。わたしはパズルや謎解きゲームなどが好きなので好奇心が沸き立つが、主日の礼拝で教会員と求道者に語るために、謎めいた書物に取り組むことを想像すると骨の折れる苦闘が予想される。その苦闘を、十三人の黙想者たちが、牧師に先立って取り組み、説教準備の対話相手となってくれていることは大変有り難い。

しかも、この黙想集は謎が詰まった書簡を、分かりやすく紐解き、聖書テキストの味わいを紹介することによって、説教と

教会形成を目指している。専門的な研究者に向けているというよりも、御言葉を求めて礼拝に集う人々の心に届けるために、

黙想が紡ぎ出されていく。それが、ヘブライ人への手紙を読む正しい方向だろう。ヘブライ人への手紙は、「説教される書簡というよりも、書簡のフォームで語られた説教」だと言われている。ヘブライ人への手紙という説教を、アレテイアで説教黙想し、礼拝で福音が語られるという、説教生成のプロセスが三重でなされる。C・メラー氏が、説教とは語られる度に「生まれ直す」と語ったことを想起する。こうして時代を超えて、この書簡が神の言葉として聴かれ続けてきた。この書簡の神観は「語りかける神」である。この書簡の冒頭に「神は、かつて預言者たちによって……語られた」（1・1）とあるように、この手紙は「語る神の手紙」（徳善義和、一四頁）なのである。

その内容は、キリストによる慰めの福音だと言える。この書簡の締めくくりに、「どうか、以上のような勧め（パラクレシス・慰め）の言葉を受け入れてください（パラカレオー・勧めめる、慰める）」（13・22）と記されている。原語では「パラク

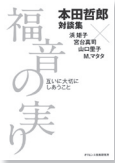
レーシスをパラカレオーする」というように、慰めが響き合う表現が用いられている（高橋誠、二〇三頁）。

この慰めを、黙想者たちは大祭司としてのキリストの姿から受け止めていく。「イエスは……憐れみ深い、忠実な大祭司」（2・17）、また、「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく」（4・15）と紹介される。「同情できない方つまり大祭司キリストは「同情そのものである」という強い肯定的な意味を持つと黙想されている（高橋重幸、六九頁）。

この大祭司の慰めとは、単なる情緒的な同情や共感ではない。旧約聖書からの祭儀的な文脈で、確かな贖罪を成し遂げたキリストの福音として語られる。ハイライトは9章の犠牲について語る場面だろう。小副川幸孝氏は、幕屋の内部や至聖所に置かれた祭具リストの意味を、謎解きを楽しむかのように生き生きと解説しつつ、キリストの贖いに集中していく。「キリストが、

雄牛や山羊の血ではなく、ご自身の血によって贖いを完成させられたことを強調するためであろう」（一一二頁）。このキリストの血に救いの確かさがある。「永遠に有効で比類のないキリストの贖罪における『キリストの血』が、『わたしたちの良心を死んだ業から清めて、生ける神を礼拝するように』」とせると、確信をもって福音を語り（14節）（一一四頁）、「圧倒的なキリストの恵みに目を留めること。そこからすべてが始まる」（同頁）と力強い招きが語られている。

わたしも担任する教会の説教準備にアレテイアを用いた。三人が紡ぎ出す福音の黙想に引き込まれ、共に謎解きを楽しみ、十字架を仰ぎ、約束を信頼する心が与えられる豊かなときを持たせて頂いた。わたしと同じように読者の皆さんも、キリストの福音に慰められる黙想体験に、本書を通して招かれるだろう。（みやぎさき・ほまれ 東京聖書学院講師、日本キリスト教団鳩山のぞみ教会牧師）
（B5判・二〇六頁・本体三三〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

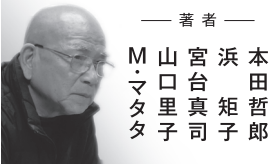


9月5日発売

本田哲郎対談集
福音の実り
——互いに大切にしよう——

貧困・差別・若者たちの不安——社会の現実を直視する中で、イエスの福音を掲げるとはいかになることか。気鋭の5人が、すべての人が人として大切にされる福音の実りを求めて、熱く語る！

定価1500円＋税



著者
本田哲郎
浜 矩子
宮台真司
山口里子
M・マタタ

人を生かす神の知恵

——折りとも歩む人生の四季

武田なほみ 著 1500円＋税

信教自由の事件史

——日本のキリスト教をめぐる

鈴木範久 著 2200円＋税

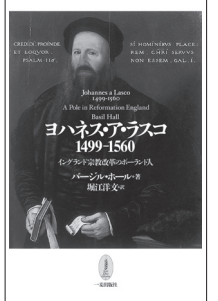
オリエンズ宗教研究所

156-0043 東京都世田谷区松原2-28-5
Tel: 03-3322-7601 Fax: 03-3325-5322

http://www.oriens.or.jp/

宗教改革者ア・ラスコを紹介する本邦初の単行本
バージル・ホール著
堀江洋文訳・解題

ヨハネス・ア・ラスコ
1499-1560
イングランド宗教改革のポーランド人



南
純

「ポーランドの貴族、人文主義者、ヨーロッパの宗教改革者」。この表題は、ア・ラスコの生誕五〇〇年に当たる一九九九年に、北ドイツ・エムデン市にあるヨハンネス・ア・ラスコ図書館で開催された国際学会で発表された論文集に付されたもので、ア・ラスコの人となりをよく表している。しかし、宗教改革史研究者の間でも、ア・ラスコの名前は依然として馴染みが薄く、上記の学会や二〇〇六年に第九回国際カルヴァン学会が上記図書館で開催されたことにより少なからず注目を浴びることとなってきてはいるが、まだまだ研究発展途上の感は拭えない。さて、本訳書であるが、ア・ラスコについて出版された本邦初の単行本であろう。訳者はその「あとがき」を「この書が、改革派神学者の一人としてはあまり顧みられることのなかったア・ラスコを、我が国においても適切な評価のテーブルに載せる一助となることを願っている」と結んでいるが、評者も全く同感である。

本書は二部構成で、前半はバージル・ホールによる「ヨハネス・ア・ラスコ」であるが、後半は「解題」と名付けられている。視点から彼の活動を描写している。それに対して、訳者による解題は「中・東欧の宗教改革運動」とりわけポーランドとの関係を解明している点で、ホールの評伝とは異なる視点を与えてくれる。

ア・ラスコには、先に掲げた表題に示されるように、「ポーランドの貴族、人文主義者、ヨーロッパの宗教改革者」という三つの顔と活動が見られるが、ポーランドの首座司教を叔父にもつ彼がいつ宗教改革者に転じたのかは判然としていない。ホールは「ア・ラスコの霊的行脚は、エラスムスの人文主義的聖書研究に端を発し、エコランパディウスのプロテスタントタイムズを経て、やっと一五四二年により急進的なツヴィンクリ神学の受容によって最高点に達した漸次的な変化であったのであろうか?」（二五頁）としながらも、その「改革が一五三八年以前であったのか、それとも一五四〇年であったかについて、我々

が訳者自身による立派な論考で、かつて『専修大学人文科学研究所月報』に発表された「中・東欧の宗教改革運動とヨハネス・ア・ラスコ」を本書用に書き改めたものだが、ホールの小伝をよく補う形になっている。

ア・ラスコは「ヨーロッパ」大陸の宗教改革者のなかでたぶん最も旅行をした人物（マリ）と言われるように、その生涯は祖国ポーランドに始まり、ポーランドに終わるが、その間イタリア（ボローニア）、フランス（パリ）、スイス（バーゼル）、ポーランド、ハンガリー、ドイツ（フランクフルト）、ベルギー（ルーヴァン）、北ドイツ（エムデン）、イングランド（ロンドン）とヨーロッパ各地を遍歴している。

しかし、宗教改革者としては彼がエラスムスの人文主義的
改革思想にふれたバーゼル時代（一五二四―一五二五年）、宗教改革の総監督として活動し始めたエムデン時代（一五四〇―一四八年）、またその継続発展としてのロンドン外国人亡命者教会総監督時代（一五四八―一五三年）に注目が集まりがちである。実際、ホールはア・ラスコの生涯全体を略述しているが、副題に

は決めることができないでいる」（二八頁）と言う。しかし、他の宗教改革者の場合と同様に、「ア・ラスコが一五四〇年に、若き妻とともにフリースラントのエムデンに向けて出発した」（同上）ことに、その決定的なしるしを見ている。

なお、ア・ラスコの主要な著作とされる「エムデン教理問答」（一五五四年出版）は邦訳され『改革派教会信仰告白集Ⅱ』（一五五四年出版）に収められている。

次第にア・ラスコ研究の裾野が広がっていることは何よりも喜ばしいことであり、多忙の中でこの翻訳と紹介を果たされた堀江洋文氏と、開拓的な出版を敢行された一麦出版社には改めて大いに感謝したい。

（みなみ・じゅん 日本キリスト教会教師）
（四六判変型・一二二頁・本体三二〇〇円＋税・一麦出版社）

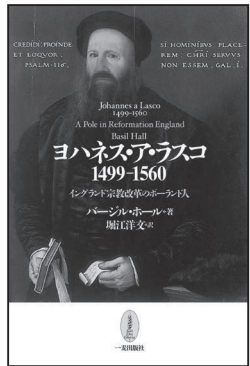


ヨハネス・ア・ラスコ

1499-1560

イングランド宗教改革のポーランド人

バージル・ホール
堀江洋文*訳・解題



初の評伝!

カルヴァンの理想を
実現させた宗教改革者。
日本の長老制をとる教会の
源流がここにある!

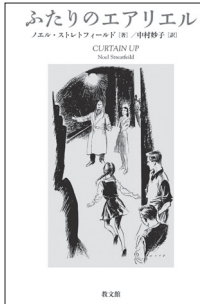
四六判変型・上製
定価【本体 2,200 + 税】円
ISBN978-4-86325-095-6



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-18
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

英国演劇界の子どもたちを温かく描く物語
ノエル・ストレットフィールド著
中村妙子訳

ふたりのエアリエル



さくまゆみこ

時は第二次世界大戦のさなか。場所はロンドン。主人公は、少女ソレル、その弟のマーク、そして妹のホリーという三人きょうだい。きょうだいの年齢は物語の発端で二二歳、九歳半、八歳となっています。

三人の母親はとうに亡くなり、海軍に復帰して出征した父親は日本軍の攻撃を受けて行方不明。おまけに三人の保護者だった牧師の祖父も亡くなり、子どもたちはこれまで会ったこともない母方の祖母の家で暮らすことに……と、物語はこんなふう

に波乱を予感させて始まります。
さて、その会ったことのない祖母というのは、実は現役の名女優で、演劇界に大きな影響力をもっています。そればかりか母親の家系は、代々名優を輩出してきたウォレン家という大変有名な一家だということもわかってきます。なぜ子どもたちがこの祖母の存在を知らなかったかという、母親がこの祖母の決めた結婚相手ではなく、別の人（子どもたちの父親）と駆け落ちしたから。子どもたちの祖母と母親はそのせいで絶縁状態にあったのです。

この作品が英国で出たのは一九四四年。なのでひと昔前の作品によくある大時代的な設定ですが、ノエル・ストレットフィールドはなかなかのストーリーテラーだし、中村妙子さんの翻訳もリズムがあってみごとなので、読者は、すつと物語に引き込まれます。

主人公たちの個性や成長もうまく描かれています。内気なソレルは、だんだんに演劇のおもしろさに目覚め、自分もウォレン家の一員だと自覚して一歩前になるようになります。マークは、姉と妹には生まれた男の子だからこそ父親への憧れも強く、祖母が敷いたレールには乗らず、父親と同じように海軍士官になりたいとはつきり主張するようになります。そして上の二人のおまけみたいな存在だった末っ子のホリーも、やはり血筋なのかコメディエンヌの才能を発揮するようになるのです。

この三人を取り巻く脇役たちも、あくの強そうな大女優のおばあさんや、どこまでも自分の意志を通そうとするいとこのミランダなど、舞台人が多いせいか個性派ぞろいです。
ストレットフィールドは、一作目の『バレエ・シユーズ』で職

業小説というジャンルを切りひらいたのですが、この作品でも演劇という職業の魅力や難しさをあちこちで伝えています。たとえば、シエークスピア劇の名優であるフランシスおじさんは、『テンペスト』の上演に際してソレルをエアリエル（空気の精）役に据えたとき、この役柄がどんなものかを具体的に説明し、指導しています。またフランシスおじさんの娘で高慢なミランダもエアリエルを演じるのですが、ソレルとミランダの演じ方の本質的な違いを、ストレットフィールドは観客や教員ミス・ジエイの口を借りて述べています。こうした場面は、演劇に関心のある読者なら見逃せない部分でしょう。

作者自身、この作品に登場する舞台芸術学院と同じような学校で学び、作家になる前はプロの女優として舞台に立っていました。なので、この作品に描かれている学校も、舞台もリアルも、当時のようすを生き生きとリアルに伝えてくれているのだと思います。

主人公の三人がそろって奨学金を受け取る場面は、ご都合主義のようにもとれますが、じつはその奨学金の送り手は、『バレエ・シユーズ』の主人公だったポーリーとペトロヴァとポージー。そういう形で、前作の後日談をさりげなく出してくるのも、おもしろいところです。
最後はハッピーエンドなので、三人をはらはらしながら見守っていた読者も、ほっと安心することができますでしょう。

（四六判・二三〇頁・本体一四〇〇円＋税・教文館）
（さくま・ゆみこ 翻訳家）



教文館の本

10月刊行予定

A・ベルレユング／C・フレーフェル編 山吉智久訳 旧約新約 聖書神学事典

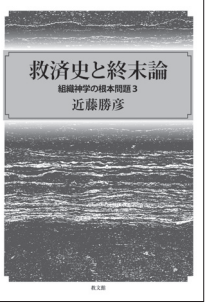
旧新約聖書を貫く最も基本的な概念や理念を、カトリック、プロテスタントの双方で解説。聖書理解のために不可欠の神学事典。執筆者全15名、全212項目を収録。

● A5判・672頁・本体18,000円

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
TEL 03-3561-5549
呈 図書目録 ●価格は税抜

伝道と教会形成の神学的基盤がここに！
近藤勝彦著

救済史と終末論 組織神学の根本問題3



牧田吉和

本書は、日本の教会のどの流れに位置する立場であつても読むべき書である。踏まなければならない立脚点と進むべき方向を指し示す重要な著作である。

本書は、著者の「組織神学の根本問題」シリーズの第一巻『啓示と三位一体』、第二巻『贖罪論とその周辺』に続く最終巻である。内容的にはタイトルのとおり、第一部では「救済史」、第二部では「終末論」が扱われている。

第一部では、キリスト教救済史観の「起源と成立」、その「変遷と危機」、さらには「一九世紀以降の救済史の神学史」が概観される。著者の救済史理解の立場からの分析と批判、評価がなされ、読者は複雑な神学史の的確な道案内を得ることができ

る。著者は、「はじめに」の中で救済史に関する自らの基本的立場を表明している(三二五頁)。イエス・キリストの「歴史的啓示」から出発し、三位一体の神の認識に至る。この三位一体の神の外に向かつての救済的意志決定にたがって救済史が把握される。その意志決定の遂行の中でキリストの贖罪の出来事

は終末論の出来事として決定的転換点をなし、「すでに」と「いまだ」の救済史的区別を基礎づける。「すでに」と将来的完成の「いまだ」との「中間時」の固有な意味は神の国に備える「伝道の時」である。神の救済は、イエス・キリストの贖罪の業から神の国のまっただき到来まで、歴史を経過する仕方で行なわれる。このような救済史理解に従えば、「救済史と伝道」(第八章)、さらには「創造と時間」(第四章)、「世界史と救済史」(第五章)、「世界統治」(第五章)などが独立した章で扱われるのも理解できよう。著者の救済史に関する基本的立場は神学的に健全で信頼に足る。

第二部では、まず終末論史の概観がなされ、その後「死の終末論」(第三章)、「千年王国説」(第四章)、「最後の審判とキリストの再臨」(第五章)、「宇宙的終末論」(第六章)などが扱われる。これらの終末論各論の扱いは、上述の救済史理解の線上で「救済史的終末論」として展開される。

著者の提示する「救済史的終末論」は終末論を個人主義的狭隘化に導かない。「死」の問題においても、個人的死の枠を超る重要な点である。本書の贖罪的・三位一体論的終末論は「中間時」の固有な要素としての福音宣教の重大性を強調する。同時に、個人主義化や教会形成の内面化に陥らず、歴史と世界に対する教会の視野の広がりと使命をも力説する。三位一体の神の永遠の御計画の遂行として救済史を捉える場合にもたらされる必然的洞察である。日本の教会が持たなければならない洞察でもある。

三位一体論から発する救済史的神学は「公同的人格」を帯びる。日本の教会のどの流れに位置する立場であつても本書と対話しなければならない根本的理由である。また本書を囲んで相互対話がなされ、本書が示す道筋における実践神学的課題が議論されるべきである。日本の伝道と教会形成に資する書である。

(まきた・よしかず) 日本キリスト改革派山田教会牧師
(A5判・四七二頁・本体六二〇〇円+税・教文館)

えて「全体的死」が語られ、社会的・宇宙論的次元をも含んで理解される(三三三頁)。「最後の審判」も個人の審判にとどまらず、人類共同体の審判を含むものとして考察される(三三六頁)。このような終末論の取り扱いはとりわけ「宇宙論的終末論」の強調となつてその特徴が現れる。著者は「贖罪論的・三位一体論的終末論」(二八三頁)という言葉も用いる。キリストの贖罪の出来事による救済は創造された世界の中で起こり、救済の完成は創造の完成として受け止められる(三九一頁)。これは三位一体論に基礎づけられた救済史理解からの当然の帰結である。つまり、著者の「救済史的終末論」は「神の国をキリスト教的終末論の統合的指導的表象」(三九三頁)とすることになる。この点から、著者は、「千年王国説」に関して、否定的でありつつも、神の国の内面化や終末論の個人的魂への狭隘化を防止する意味で真理契機を認める(三六一頁)。以上のような問題意識は、日本の教会の終末論の弱点の克服に係る

日本聖書協会
God's Word — Life for the World

7色刷カラー聖書地図入り

大型引照つき 口語訳聖書

再版のご希望が多かった、
『大型引照つき口語訳聖書』。
技術的に不可能とされていた
7色刷カラー聖書地図を
復刻した冊数限定発行です。

2015年に発行60周年を迎えた口語訳聖書は、「毎日出版文化賞」を受賞するなど話題を集め、キリスト教会、ミッションスクールに広く普及しました。文語訳読りの歯切れのよい文体で、現在も日本中で愛用されています。

引照つき口語訳聖書

- ㊦ クロス装 JC053 定価(本体6,500円+税)
- ㊦ 折革装/三方金 JC059S 定価(本体15,000円+税)

※それぞれ、ケース入り、A5判。
共に巻末に、カラー地図12ページ(ほかに地図索引12ページ)入り。

お問合せ ☎03(3567)1987(頒布部)
<http://www.bible.or.jp/>

本屋さんを選んだ お勧めの本

仙台キリスト教書店 黒田 忠

『教会では聞けない 「21世紀」信仰問 答』

上林順一郎監修
みふみマンガ



1,800円+税
キリスト新聞社

本書は「キリスト新聞」に連載されている教会質問箱を単行本にしたもの。シリーズ2作目となる本書の副題は「悩める牧師編」です。全国の牧師たちから寄せられた55の質問について、17名の専門家が答えてくれます。牧師さんだけではなく、信徒の方にもぜひ読んでいただきたい一冊です。

『一笑懸命』

山北宣久著



1,200円+税
日本キリスト教団出版局

この本を読んで、いつの間にか自分が、ユーモアのない人間になってしまったと感じました。山北先生の軽妙洒落な語り口と、長嶋洋一氏のイラストが一体となってメッセージを語りかけます。タイトルの通り、始めから終わりまで『一笑懸命』になって読みました。忙しい日常に追われてしまっているからこそ、この本から明るい笑いと「福音」を聴き、心を温めてください。

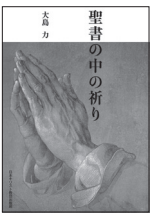
仙台キリスト教書店

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-13-6 東北
教区センター・エマオ1F
TEL: 022-2223-2736 (FAX同)
E-mail: fgcwks24@ybb.ne.jp

バイブルハウス南青山 鈴木淳之介

『聖書の中の祈り』

大島 力著



1,300円+税
日本キリスト教団出版局

ふとした事情で、大島力先生・一枝先生ご夫妻が教会にいらしている石神井教会に一年間お世話になったことがあります。力先生の説教は、最近印象に残った本の題名から始まるものが多く、「昔読んだ、トーマス・マンの『ヨセフとその兄弟』では……」とか、「先週、『マタイ受難曲』を聴く機会がありました……」、などハイブロウな出だしから始まり、話が大きくなり、これで收拾がつかののだろうかとか心配する直前で、きちんと話が収まり使信も伝わるといふという名人芸の説教でした。本書に収められているのはそのような名説教です。

石神井教会の礼拝は、力先生と一枝先生ご夫妻で執り行われます。礼拝での祈りを一枝先生が担当され、力先生が説教を主に担当されておられました。礼拝後にはご夫妻で出席された人々と親しくお話をされ、教会の人々への深い愛を感じました。ご夫妻は今年3月に退任されました。最後の礼拝の日、力先生の説教はもろろん素晴らしいもので

した。また、一枝先生の司式された聖餐式の式文朗読の一言一言に、教会員への想いが感じられ、会堂からはすすり泣きの声絶えなかったことを覚えております。旧約聖書学者としての深い学識をもちつつ、かみ砕かれた説教に腐心された力先生の説教集には、非常に深い味わいがありますので、ぜひ多くの人々に読んでほしいと思います。

バイブルハウス南青山

〒107-0062 東京都港区南青山5-10-2
TEL: 03-6418-5230
FAX: 03-6418-5231
E-mail: biblehouse@bible.or.jp

■教文館

イエスの降誕物語

——クリスマス説教集

及川 信著

「民全体の大きな喜び」と告げられたイエスの誕生。福音書に記された誕生にまつわるエピソードを探究し、クリスマスを祝う意味を真摯に問う説教集。

四六判・280頁・本体2100円

キリスト教弁証学

近藤勝彦著

なぜキリスト教でなければならぬのか？ 世俗化・脱宗教化した現代世界に、キリスト教信仰の真理性を鮮明に語るのと同時に、教会に不断の改革を求め、キリスト教の自己変革を追求する。

A5判・672頁・本体5800円

■日本キリスト教団出版局

現代キリスト教神学

理解を求める信仰

上 D・L・ミグリオリ著

下田尾治郎訳

「神学」とは信仰を理性により考究し続ける営みである。組織神学を構築する各分野を、古典的神学から黒人神学・フェミニスト神学など現代の問題と切り結ぶ神学ま

INFORMATION

近刊情報

で視野に入れ概説。現代英米圏で広く用いられ、信頼される、キリスト教神学を学ぶ上で最良のテキスト。

A5判・346頁・本体4200円

教会を通り過ぎていく人への福音

——今日の教会と説教をめぐる対話

W・H・ウイリモン／S・ハワーワス著

東方敬信／平野克己訳

美しい音楽を享受し、知的な説教を楽しみむけれど、自らのキリスト教信仰と深く関わることなく散つていく人々——。大学チャペルに集う多くの会衆を、著者は「通り過ぎていく人（ストレンジャー）」と呼ぶ。そのような人々の心に届けられた10編の説教とその率直な批評。

四六判・242頁・本体2200円

■新教出版社

ソクラテスの死とキリストの死

ベルトール・クラツパート著

武田武長監訳

「バルト——ボンヘッフアーの線」を一貫して追求し続けている著者の表題の論考をはじめ、アブラハムを媒介とした宗教間対話、三一論、洗礼論、また「カルヴァン神学のリアリティ」など興味尽きない論考と説教8編を収録。著者9月来日予定。

四六判・380頁・予価2500円

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・IT71F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区稲2-2 様ヶ丘センタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kristokyoushoten@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://www7.biglobe.ne.jp/~yldnrcs/bs/uev.html	biblehouse@bible.or.jp	00250-4-2512
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881		sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通 一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612		info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepages3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsta@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		kjorden@mbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三鷹ビル2F	078-331-7569	078-331-9833			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mex.htm	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	903-0207	中壠郡西原町字豊777 沖縄キリスト教院内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2016年9月号

特集 聖書と老い

寄稿者 渡辺信夫、小塩トシ子、櫻井重宣、

原慶子、川又俊則

寄稿 「受けるより与える方が幸いである」はイエスの言葉か（荒井献）／好評連載 聖書とわたし（宮下規久朗）、聖書素読（金必順）、レヴィナスの時間論（内田樹）、新約釈義（辻学）、南島キリスト教史入門（二色哲）、詩篇の思想と信仰（月本昭男）、こぼれの履歴書（佐藤優）ほか

A5判・本体588円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148
Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

五月末、大阪出張の帰りにオープンしたばかりの商業施設、「枚方T-SITE」に立ち寄ってみた。ここは書店を中心とした百貨店(?)なのだそうです。コンセプトは、「上質な日常を届けるライフスタイル・デパートメント」。「エッー大阪で? しかも枚方市ってかなり遠いのにと、大阪の方からお叱りを受けそうな予想を持って到着したら驚いた。

駅に直結した総ガラス張りの近未来的建築、店舗というよりはスタイリッシュな空間、洗練されたデザインの書棚に、「食の読物」といった気の効いたタイトルで本が配列されている。これが単純に「食品」コーナーだったら普通なのだが、「やるな大阪、今日のところは負けを認めよう」と呟いた。同店は代

官山、湘南に次ぐ三店舗目だが、枚方市は創業の地と聞く。

米国の書店「バーンズ&ノーブル」は、知の香りがするらしいが、ここは自分のライフスタイルにこだわる人たちを惹きつける新時代の匂いがする。ホール内のコーヒーショップで本を読み、パソコンを打つ。また書店なのにベビーカーを押す若いカップルが多かったのが特に印象的だった。何より書棚のレイアウトに、昔の本屋さんの「店員オススメ」的な、知られざる本の素晴らしさを伝えようとする意欲を感じて嬉しかった。

それは私たちキリスト教専門書店にもある。本誌24・25頁に掲載されている「本屋さんが選んだお勧めの本」コーナーをぜひ読んでいただきたいと思う。
(寺田)

本のひろば 2016年10月号 予告

本・批評と紹介…中道基夫著『天国での再会』、今井敬隆著『あなたはヨブと出会ったか』、勝又悦子他著『生きるユダヤ教』、ファン・アッセルト著『改革派正統主義の神学』、吉岡恵生著『立ち上がれ』、『大崎節郎著作5』、『日本キリスト改革派教会宣言集』他

現代人のための
希望の倫理学



自由への指針

「今」を生きる
キリスト者の倫理と十戒

● 四六判・208頁・本体1,600円

信仰、愛、性、結婚、仕事、経済、政治、戦争、正義、善悪、欲望……、
私たちが抱えるリアルな倫理的問題を信仰者としてどのように考え
ばよいのか？ 私たちの生きる喜びがここに！

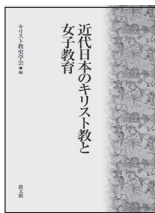
好評既刊

宣教師と日本人

明治キリスト教史における受容と変容

明治期キリスト教の特質と宣教活動の歩みを、諸教派にわたり網羅し
た初めての研究。

● 四六判・234頁・本体2,500円



キリスト教史学会編

近代日本のキリスト教と 女子教育

明治期以降、日本の女子教育をリードする
存在であったキリスト教。プロテスタント女
性宣教師、日本人キリスト教徒、カトリック
修道女という母体ごとにその発展までの軌
跡を検討し、多様なありようを提示する。

● 四六判・200頁・本体2,400円

10月刊行予定

旧約新約 聖書神学事典

A・ベルレユング／C・フレーフェル編

山吉智久訳

旧新約聖書を貫く最も基本的な概念や理念を、カトリック、プ
ロテスタントの双方で解説。聖書理解のために不可欠の神学事
典。執筆者全15名、全212項目を収録。

● A5判・672頁・本体18,000円

好評既刊

聖書神学をどう行うのか？ 聖書神学の構想と実行

P・シュトゥールマツハー 原口尚彰訳

「聖書神学」という問題提起をコンパクトにまとめた講義録。聖書を聖
書によって読み、旧・新約聖書の統一性を主張し、聖書学の二体性を取
り戻す(聖書神学)を提唱する。

● B6判・140頁・本体1,900円

日本国を建ててるもの

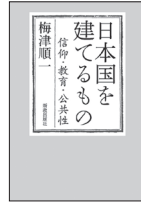
梅津順一 著

青山学院院長

8月25日

信仰なき市民社会への挑戦

信仰・教育・公共性

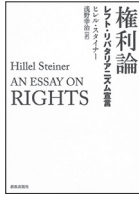


ピューリタニズム研究の第一人者であり、長年キリスト教教育に従事してきた著者が、近代日本のキリスト教、日米キリスト教大学の歴史を振り返り、信仰と社会科学の二つの足場から、日本の将来の精神的基軸を構想する力作。本多庸一、徳富蘇峰、内村鑑三、福澤諭吉などの思想家たちはキリスト教思想に何を見、どのような日本を夢見たのか。今学ぶべき日本のキリスト教大学のルーツとは。
◆四六判・本体2800円

権利論

ヒレル・スタイナー著 / 浅野幸治訳

大反響



「分析的政治哲学の一頂点」(森村進一橋大教授) 個人の所有権と財の配分のあり方を精緻な理論構成によって徹底的に考え抜き、自由と平等のダイナミックな均衡を提示する。ロールズ『正義論』以来の議論に一石を投じたレフト・リバタリアニズム(左派完全自由主義)の基本文献、待望の邦訳。著者11月来日予定。
◆A5判・本体5000円

キリストが主だから

いま求められる告白と抵抗

歴史に対する 信仰者の責任

山口陽一・朝岡勝 著

【新教コイノニア32】

戦後政治の文脈の中で現在の安倍政権の施策を鋭く分析。第二次大戦下の教会の過ちと少数の先達の戦いに学びつつ、今やキリスト者の「抵抗権」と「信仰告白」に関わる事態だと訴える。
◆A5判・本体7000円

使徒行伝 下巻

【現代新約注解全書】

好評発売中

荒井 献 学界最高水準の行伝注解が、40年近い歳月をかけてついに全3巻完結。下巻には「補論：最後のパウロ」「概論使徒行伝」を付す。
◆A5判・本体9000円

人が神にならないために 説教集

荒井 献 著者初の説教集。入手し難かったコイノニア社版を復刊。◆B6判・本体2000円

本心の心は 第七〇四号 二〇〇六年九月号

一九五七年七月一日発行 第三種郵便物認可
二〇〇六年九月一日発行(毎月一回一日発行)
発行所 〒162-0814 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター
電話 〇三三二六〇一六五二 振替 〇〇一七〇一五二一六一七九
発行人 本村利春 編集人 土肥研一 印刷所 (株)平河工業社
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話 〇三三二六〇一五六七〇

定価七八円(税抜七二円)(762円)
一年分二三〇〇円(送料共)